



Title	生老病死に学ぶ
Author(s)	藤田, 綾子
Citation	生老病死の行動科学. 2004, 9, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

生老病死を学ぶ

我が国の高齢化率は1970年に7%を、1995年に14%を超え「高齢化社会」から「高齢社会」へ突入し、2015年には25%を超えて「超高齢社会」になります。

1995年の人口問題研究所の「人口問題に関する意識調査」によると「高齢化」することは「困ったことだ」と答える人が42.6%、「非常に困ったことだ」という人が14.7%であわせると6割近い人たちが「困ったことだ」と評価していると報告されています。

このように社会的に「困った」と思われていることをできるだけ「困らない」ようにしていくことが我々の仕事だと思うのですが、これまで「心理学」は「高齢者」や「高齢社会」に関する研究にどのように取り組んできたのだろうか、日本心理学会で発表された研究発表を数と内容から分析をこころみました。

図1は1970年から2004年までの34年の変化を表していますが(1980,1982, 1983, 1987欠)、1970年には1題しかなかった発表が2001年には45題になり、2002年34題、2003年には32題とわずかに減少傾向を示したのですが2004年にはまた50題(題名のみから判断)となっています。発表が減って気になっていましたが、今年はまたふえましたので少し安心しました。

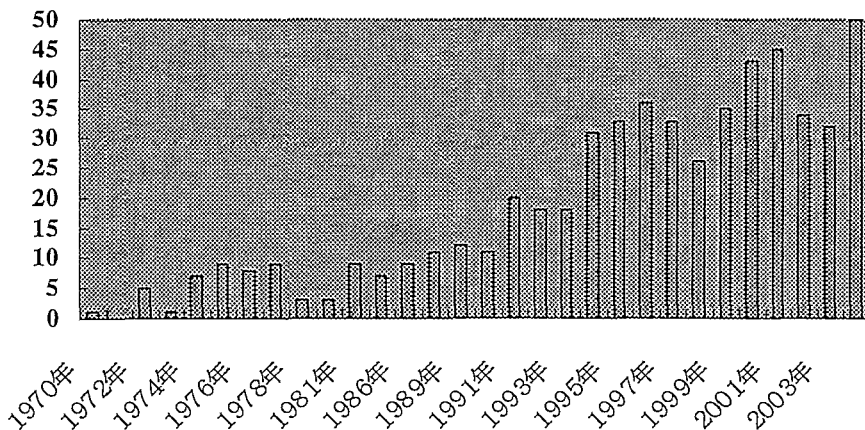


図1 日本心理学会高齢者関連発表数の推移

次に内容についてみますと、「高齢者の生活・人間関係」がもっとも多く19%、2番目が「適応・生きがい」についてで18%、3番目が「人格・パーソナリティ」で15%がベスト3で、知覚・記憶・学習など心理学の基礎的な部分が少ないのです。(図2)

このことは、高齢者研究が高齢期を不安・依存・喪失・孤独などの時期とみる、いわゆる「問題」に焦点があてられており、はじめから高齢者存在そのものが「問題」としての対象として心理学者がみている傾向のあることを示しています。

このような高齢者への差別的な見方をバトラーやパルモアは「エイジズム」(年齢差別)とよび、その対局にある考えとして「プロダクティブ・エイジング」を提唱しています。

「プロダクティブ・エイジング」は高齢者を社会の問題として研究するだけでなく、高齢者に

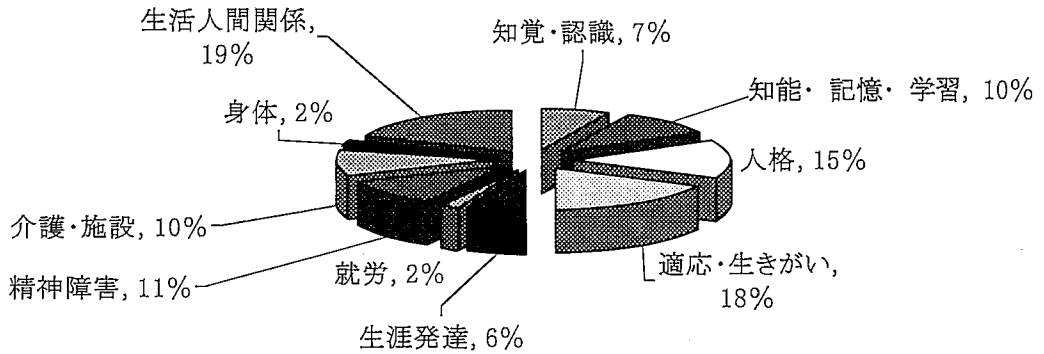


図2 研究発表分野

いかに社会の力になってもらえるかということでありそのための研究を始めるべきであるという主張であります。

本学の研究室でもそんな研究を少しずつ展開していければと願っています。

幸い、「臨床死生学研究分野」は創始者の柏木教授と恒藤助教授、平井助手によって立派な研究と学生が育ってきています。

今後ますます社会に必要とされる課題に取り組むわれわれのこの研究室のさらなる発展への意味を込めて、従来「臨床死生学年報」として発行していたものを「生老病死の行動科学」と名称を改めさせていただきました。

ご周知のように「生老病死」は「人間がこの世で避けることのできない四つの苦しみ」と云われますが、その苦しみへの挑戦は人それぞれであり挑戦の仕方によっていろいろな人生の歩みが生まれます。

私たちの研究室は人生への様々な挑戦の仕組みや意味を究明することによって、人々が少しでも苦しみから開放される解決の糸口を見つける手助けになりたいという思いを込めて命名しました（英語訳として、仏教用語本来の意味では生=Birthですが、我々の研究テーマには“人生・生き方”がふさわしいので生=Lifeとしました）。

発行にあたっては、大学院生が原稿執筆から編集まで自主的に行いました。

未熟な部分もありますが、多くの方々に読んで頂き、ご批判頂くなかでさらなる成長をしていきたいと願っています。

今後とも、多くの方々の本研究室へのご鞭撻・ご支援をお願い致します。

2004年7月

大阪大学大学院人間科学研究科教授 藤田 綾子